

〔施設紹介〕

旧石戸谷家住宅―堀越城跡ガイダンス施設として

生まれ変わった旧石戸谷家住宅―

福井 敏隆

昭和六〇年（一九八五）に弘前市指定有形文化財（建造物）に指定された旧石戸谷家住宅は、平成一六年（二〇〇四）に所有者から市に寄贈され、当地で活用されていたが、主屋の老朽化が顕著になったため、同二年（二〇〇九）に緊急策として建物を解体し、部材を保存してきた。その後、国指定の史跡である堀越城跡の隣接地に移築して公開するとともに、堀越城跡のガイダンス施設としても整備・活用する事になった。移築復元工事を同二七年（二〇一五）度から同三〇年（二〇一八）度まで行い、外構工事を令和元年（二〇一九）度を実施した。令和二年（二〇二〇）四月一七日にオープンを迎えたが、折からのコロナ禍の影響で、セレモニーなどは行われず、ひっそりと公開され現在に至っている。『旧石戸谷家住宅移築工事報告書』^①（以下『報告書』と略記）が発行されているが、部数が限られているため、一般の方々の目に触れる機会も少ない。そこで、先ず同家の文化財としての価値と、ガイダンス施設としての役割を紹介し、遅ればせながら周知を図ることとしたい。

旧石戸谷家住宅は元々は弘前市范中（現弘前市浜の町東二丁目）に所在した。この住宅を建築した石戸谷家の先祖は、種里村（現鯉ヶ沢町種里町）に住んでいたと伝えられている。范中村に移住後は地域の開発に

貢献して、「范中の大家^{おおや}」と呼ばれ、藩主も立ち寄る家柄であったと言われている。津軽を代表する豪農であった。主屋の構造は、木造一部二階建、寄棟造、茅葺、南及び西・北面に庇付、亜鉛引鉄板葺であり、総床面積四三・八二㎡（約一三〇坪）、桁行二九・五九m、梁間一一・四五mの規模を持つ。文政五年（一八二二）の建築という家伝が伝えられて来たが、安政六年（一八五九）正月二一日の年紀をもつ「普請申請帳」^②が残されていたことや、軒の高い構えと木材の風化度合いなどからみて、江戸時代末期の一九世紀半ばに建築されていたものと推定されている。現存する江戸時代の農家主屋としては国内最大級の規模を有す。^③『報告書』によれば、国の重要文化財に指定されている五所川原市湊にある平山家住宅と並んで、津軽地方の最上層民家の変化発展を知る上で貴重な存在であるという。^④

それではガイダンス施設としての中身を紹介していこう。なお、以下の居住部分の表記をカタカナにしたのは、古民家調査の基本表記に倣ったためである事を、あらかじめお断りしておく。先ず中に入ると、エントランスホールがあり、堀越城跡の復元模型が入館者を出迎えてくれる。左隅が案内カウンターになっている。この部分は本来トグチと呼ばれた所である。右に進むと、ウマヤであった部分が展示エリアとなっている。六室あり、旧石戸谷家では最大で六頭の馬を飼育していた事がわかり興味深い。時計と反対回りに「一 為信と堀越城」「二 堀越城とは」「三 発掘された堀越城」「四 城内の様相」「五 よみがえる堀越城」「六 企画展示」の六コーナーで構成されている。展示パネルの説明を読んどいくと、為信の城「堀越城」について紐解けるようになっていく。「一」

では「為信の出現」から「弘前城への移転」、そしてその後の「古城の時代」を紹介している。「二」では「堀越城前後の堀越のようす」や「津軽歴代の城のようす」を紹介しており、発掘によって出土した中世の遺物の展示もある。「三」では「史跡指定」から「発掘調査」に至る経緯と、調査で判明した「堀越城の特徴」などを紹介しており、出土品の展示もある。旧石戸谷家の展示パネルが次に続く。「四」では「戦の場」、「儀礼の場」、「生活の場」と、様々な顔をもつ堀越城のようすを紹介している。「五」では、「現代の築城」の方法や、地域とともに未来へ歩む堀越城の姿を紹介しており、堀越城の復元した土塁の工事状況が分かるのは貴重である。「六」は、堀越城で交差する様々な「歴史上の人物」を語る貴重な資料を紹介している。為信が秀吉から拝領した、国の重要文化財の太刀銘友成作の拵の複製や、木造豊太閤坐像（市指定有形文化財（彫刻））の複製、さらには市指定有形文化財（歴史資料）で、関ヶ原の合戦に出陣した際に使用されたと伝えられる旗指物の複製が目を引く。

展示を見終わってエントランスに戻って来ると、右手にはかつての二ワ部分がワークスペースとなっており、堀越城と旧石戸谷家住宅の紹介ビデオを楽しむことが出来る。ここはワークショップやコギン刺し、組子細工、漆塗り体験などの制作体験を行えるようなスペースとして整備されているが、コロナ禍の影響もあり十分な活用がなされていないのが残念である。なお二ワ部分右手奥のイナベやは農具の展示コーナーである。エントランスの左手は、復元された石戸谷家住宅そのものを見学する事が出来るようになっている。履き物を脱いで、板の間の休憩所となっているかつてのダイドコに上がって、天井を見上げると、茅葺き屋

根の小屋組を望める。縄がしっかりと茅を梁に巻き付けて留めているようすを見て欲しい。次の間はチャノマで、ここから畳敷きの部屋となる。その奥がナガザシキ、左手がコザシキ、その奥の角はインキョで、ご隠居さんの部屋であった。ナカザシキの右手奥はオクザシキである。ナガザシキとオクザシキの間は襖で仕切られている。襖絵は弘前市西茂森の鳳松院二九世住職で、画家でもあった故黒滝大休氏の画いた屏風絵（種里山鳳松院 老松図）を複製したものである。元の襖絵は痛みが激しく使用出来なかったためであるが、同家と鳳松院の繋がりを伝える作品である。両ザシキの西側にはエンが付けられており、その西は、主屋解体時に残されていた景石などを使用して作庭した、大石武学流庭園（監修は宗家木村亨星氏）となっている。これは、当初の主屋所在地の庭園の荒廃が著しく、原形を明らかにする事が出来なかったため、主屋建築と同時に津軽地方に流布していたとされる大石武学流の庭園を整備したものである。

堀越城跡のガイダンス施設として生まれ変わった旧石戸谷家住宅は、入り口の右側（東側）がガイダンス施設としての役割を担い、左側（西側）が津軽地方の豪農屋敷を体験出来る場所となっている。開館期間は四月一七日から十一月二三日までであるので、是非訪れて欲しい施設である。駐車場も完備しており入場料は無料である。旧石戸谷家住宅を堪能したら、隣接する堀越城跡もゆっくりと見学して欲しい。本丸跡の展望デッキからは、天気が良ければ岩木山がほぼ真正面に望める。また、三の丸の展望デッキに立つと、為信が津軽統一の第一歩を踏み出して攻略した石川城跡も望める。為信の見た景色を体感出来るのが堀越城跡である。



写真③ 太刀銘友成作の拵（複製）



写真① 旧戸谷家住宅（以下、④以外は筆者撮影）



写真② 展示パネル（為信から信枚へ、そして弘前城へ）

なお、未筆ながらコロナ禍の影響などで、紹介が遅れたことをお詫びしたい。



写真⑥ オクザシキから見た襖絵



写真④ 木造豊太閤坐像（複製）・文化財課提供



写真⑤ 茅葺き屋根の小屋組

註

- (1) 『弘前市指定有形文化財 旧石戸谷家住宅移築工事報告書』（令和二年（二〇二〇）三月二三日・弘前市教育委員会）。
- (2) 小山連「弘前・石戸谷家住宅とその普請帳について」（昭和六〇年（一九八五）十一月の日本建築学会東北支部研究発表会のレジュメによる）。
- (3) 前掲（1）第八章総括。なお、旧石戸谷家住宅の規模などに関する主要寸法、建築推定年代や文化財的価値については、前掲（1）に記載されているデータ及び、同書の全体監修者でもある史跡津軽氏城跡堀越城跡整備指導委員会委員であった大野敏氏（横浜国立大学大学院教授）の見解を使用した。また、旧石戸谷家住宅の移築復元工事に関わる記述部分では、弘前市教育委員会文化財課の小石川透氏の協力を得た。特に記して感謝の意を表したい。
- (4) 前掲（1）第八章総括。

（ふくい・としたか 弘前市文化財審議委員長）